

第2章

地球市民学

多文化コミュニケーション学

第1節 地球市民学 前期

齊藤真子・鈴木克彦
岡村明・野田真里*

【抄録】 日本文化・韓国文化・言語コミュニケーションの3グループに分かれ、文化比較（生活文化・言語文化・宗教文化）についての学習を進め、異文化との共生に必要なものや諸問題を考える。3グループの合同授業では、外国人留学生を招いて交流会を持ち、各文化の共通性と異質性を体験的に理解し、多文化コミュニケーションの重要性や必要性に気づかせ、異なる文化に対する感性と寛容性を高める。そして科学的分析力・思考力や地球市民としての倫理観を身につける。

【キーワード】 学び合い 留学生 交流会 コミュニケーション 異文化理解 生活文化 言語文化 宗教文化
異質性 同質性 地球市民

1. はじめに

「多文化コミュニケーション学」では、世界の多様な文化（自国の文化を含め）や文化の背景にあるものの見方・考え方について理解し、疑似体験や学び合いを通し異文化との共生に必要な感性と寛容な心を高め、異文化間におきる諸問題に柔軟に対応し行動する力を育成することをねらいとしている。このねらいを達成するために、高校2年生を対象に1クラス40名を3つのグループ（日本文化・言語コミュニケーション・韓国文化）に分け、それぞれのグループを3人の教師（国語・英語・美術）が担当して生活文化・言語文化・宗教文化についての授業を少人数で展開してきた。但し、3つのグループがそれぞれ単独で授業をするだけでなく、3グループ合同授業を5回行い、学び合いの場面をつくり、他グループとの知識の共有を進めた。

今年度は、次の3点を重点目標とした。

1) 多文化コミュニケーションの重要性に気づき、異なる文化に対する感性と寛容性を高め、身につけさせる授業内容を工夫する。

2) 文化比較の場面では同質性と異質性のバランスを考えた授業内容に心掛ける。

3) 3グループ合同授業で外部講師（留学生）による直接体験や講義の導入とまとめを効果的に行う。

1) に関しては、授業の中で、異なる文化に対する感性を高め、身につけさせる場面を取り入れる等、ものごとを客観的に理解する力を伸ばしていく。

2) に関しては、日本と他国の文化を比較する場合、異質性に注目するだけでなく同質性にも目を向けるような授業内容を考える。生徒の抱く感情（嫌悪感や好

感)を考え、同質性と異質性をバランスよく扱うことに心掛ける。

3) に関しては、今年度も、授業の始め（5月）と夏休み後の授業の終り（9月）の2回、3グループ合同授業として、外国人留学生を招く。第1回目は挨拶を通して異文化に直接触れる機会とする。また第2回目は自分たちが調べた課題を分かりやすく留学生に伝えるという実践的な授業の試みである。半期の「多文化コミュニケーション学」の授業を通して身につけた知識や態度が、実際に外国人（留学生）に接する場合に生かされるかどうかを試す機会とする。

9月に行われた2回目の合同学習会には、特別授業「文化とコミュニケーション」の講師である高井先生にも来ていただき、留学生とともに生徒の発表を聞いていただいた。そして生徒と留学生とのやりとりをふまえて、異なる文化のコミュニケーションのあり方についての専門的なコメントをしていただけた。「多文化コミュニケーション学」（前期）の実践的なまとめの授業となった。

2. 授業の実際

(1)特別授業1「多文化社会をサバイバルする！」合同ワークショップ（3グループ合同）（総合コーディネーター野田先生）（4月23日実施）

*中部大学准教授



ワーク1「世界の挨拶・アジアの挨拶」

- Q 1 どの挨拶が好印象的でしたか？理由は？
- Q 2 どの挨拶に違和感をおぼえましたか？理由は？
- Q 3 貴方の「アタリマエ」とどこが違いましたか？
どんな発見がありましたか？

ワーク2「身近な多文化コミュニケーション」の事例

生徒の感想は「野田先生の回がとても印象的です。世界のあいさつを今まで知らなかったの、その国柄があいさつにも表れているのかなと考えたりできて楽しかったです。」「野田先生のお話。あいさつの仕方が男女で違っていたり、お坊さんに対してだけ特別なあいさつがあったりしてびっくりしたけど、面白いなと思った。」「特に世界のあいさつでは本当に文化圏が違うと形式も全然違うと実感させられました。あいさつクイズ、難しいです。」である。

(2)特別授業2「多文化コミュニケーション合同ワークショップ (3グループ合同)

留学生との合同交流会 (野田先生) (5月21日実施)



留学生は、(ナイジェリア) (インドネシア) (パキ

スタン) (インド) (スリランカ) (中国) の六名の方である。小グループに分かれて、留学生の方々の日本での経験を聞き、異文化の方には奇異にうつる自文化(日本文化)を留学生に説明する。また、留学生の方々の国の挨拶を経験し、その挨拶の背後にある考え方を知り、多文化コミュニケーションを実践してみることである。



生徒の感想は「印象に残ったのは5月21日に行われたワークショップです。私は今まで東アジア・東南アジアの方と接する機会が比較的多く、その他の地域の方の話の聞いたのが良かったです。今までも外国の方に日本との文化の違いを聞いたことはありましたが、新たに日本との相違を知ることができました。」「留学生との交流会で外国と日本との文化の違いを学んだときに、日本の行事に留学生の皆が驚いていたこと。常識が通じないのは生活する上で大変だなと感じ、また、留学生の皆さんから他国の文化について少しでも知ることができてとても新鮮だった。」「様々な国の留学生の方が来てくれて、それぞれの国の話をしてくれた授業はものすごく有意義だった。日本にいるだけでは分からない他国の文化というのが、リアルに伝わってくる話だったという点に関心を持った理由だと思う。自分たちはフツーだと思っていたことが他の国

では全く異なる場合があるということには驚いた。また、日本には全くない文化が他の国にはたくさんあることを知り、同じ人間でも全く異なる文化の中で育つと考え方や価値観が違って来る事にも納得することができた。その異なる文化の中で留学生の方々がどのようにして日本を受け入れてきたのか、その中で苦勞した点などをそれぞれの国の視点からリアルな声で聞いたということも自分にとってはイイ経験であった。」である。

(3)特別授業3「文化とコミュニケーション」(特別講師 高井次郎先生)(6月26日実施)

始めに、高井先生は「文化の定義」について述べられた。次に、多くの身近な例をあげながら説明された。最後に「日本のコミュニケーションの特徴」についてふれられた。まとめとして

- ・文化はいろいろな次元で比較できる
- ・比較する時に注意すべき点は、自文化の視点から比較していないかということ
- ・最新の文化理論は、文化的自己観
- ・心理学では個人主義・集団主義も重要な理論的枠組み

と述べられた。

生徒の感想は「文化とコミュニケーション」の講義、内容においては様々な視点があり、特に「時間志向」の話に興味をもった。国・地域によって、どこに視点を置いているかも違うのが分かり、現在志向の日本に住む私には未来志向のアメリカの話は新鮮だった。さらに高校で勉強するようなものと違って、大学の授業を受けているような気分だった。そして、早く大学に行きたいと思った。「大学の先生方呼んで行った特別授業がとてもおもしろかったと印象に残っている。やはり、専門に研究されている方のお話は詳細まで筋が通っていて、納得させられた。今後の進路選択などの点においても、こういう学習を授業として行っているのか、といい参考になったと思う。実際に現地へ行ってその文化を文字通り肌で感じとってきた人なので、その話にはリアリティーがあった。世界中に散らばる数多くの文化の違いをわかりやすく学べたし、同時に日本の文化がいかに特異なものなのかも学べた。ある意味で貴重な文化だとも感じたし、各国・各地域の文化がいかに「守られるべきもの」であるのを知った。」である。

(4)特別授業4「世界の宗教文化入門：多文化コミュニケーションと宗教」合同ワークショップ(3グループ合同)(総合アドバイザー野田先生)(6月25日実施)

問題1：諸君にとって宗教は大切ですか？

問題2：世界的に見てこういった日本人の宗教観は「アタリマエ」? 「ヘン」?

問題3：地球村の中の国々で宗教を大切にしている国・大切にしていない国にはどのような傾向?

問題4：地球村100人のうち…

仏教徒 約()人、キリスト教徒 約()人、イスラム教徒 約()人、ヒンズー教 約()人、無宗教 約()人

問題5：日本人は年末年始になると1週間で3回宗教を変える。

問題6：結婚式とお葬式

問題7：世界のお祈り(仏教、キリスト教、イスラム教)

生徒の感想は「宗教文化についての話が、とても印象的でした。私は普段の生活に宗教が関わっていると思っていなかったし、自分でも宗教活動をしていると思っていなかったのが、先生の話聞いて、自分も宗教に関わっているんだと実感したから。あと、多文化社会を生き抜くためにというところで、違いを認めつつ共通性を見出す能力が必要という言葉もとても印象的でした。」「宗教文化の授業はとても興味深かった。日本では根強い宗教観があるわけではなく、私自身宗教なんて古いに等しいという考えがあるが、外の国ではそれがどれだけ異様かということが思い知らされた。どちらが良いのかということではないが、宗教観に依存するという生活が私には逆に異様に思えて、世界は根本的にいろいろな違う考えを持った人々(文化)があるんだなと実感した。」「日本の宗教文化について。他国はしっかりと自分の宗教を持つところがあるのに、日本は色々な考えをもってるから。それならば、日本人は何を信じて現在を生きるのかな? 私は今何を信じて生きてるんだろう? とちょっと考えてしまったから。韓国人と日本人の考え方の差がとてもあることについて。留学生からの「日本のヘンな文化」について。言われてみると「ああ確かに」と思えることがあったから。日本ってどういう国なんだろうと、外側から見ることができたから。」である。

(5)発信型多文化コミュニケーション合同学習会・発表会「価値観の異なる人々とのコミュニケーション力を磨く(留学生とともに)」(9月24日実施)



教育発達科学研究科の高井教授と名大留学生2名(ムカラアさん・チンタカさん)をお招きして、「価値観の異なる人々とのコミュニケーション力を磨く」を3グループ合同で行った。

先回各グループで発表した「夏休みの課題レポート」の中から代表者を選び、3人の方に発表を聞いていただいた。その後、留学生から質問や感想を出してもらい、発表者(生徒)と質疑応答をした。そして、最後に高井先生から留学生の質問と生徒とのやりとりについてのコメント(評価)をしていただくことで「多文化コミュニケーション学」の授業のまとめをした。

高井先生からは、生徒の発表がテーマ・内容・表現方法とも素晴らしいものばかりであると評価をしていただいた。また、留学生からの質問の文化背景や考え方の違いが何故生まれるのか、どうしたら良いかについて、解説をしていただけたので、多文化コミュニケーションについて深く学ぶことができた。

生徒の感想は「学習の最後の発表会は、個人のテーマが個性あふれている感じで、テーマのリストを眺めるだけでも楽しかった。内容もみんな濃く、ときには面白く、とても印象に残っています。」「最後のそれぞれのグループの代表が研究したことを発表する会で、非常にレベルの高い発表を聞く事ができ、勉強になった。自分が昔、韓国に行った事があり、この度の研究発表会で韓国人の考え方にスポットを当てている発表があり、なるほどと思った。」である。

(6)グループ別授業

小グループに分かれての授業は6回で、各グループの人数は生徒の希望を調整して12～13人に分けた。

1) 日本文化グループ(齊藤)

①授業内容例

テーマは「日本のところを探る」①から⑥として、「桜」「ことば」「ことわざ」「表現」「宗教文化」「年中行事」について取上げた。

生徒の自由記述からは、「日本の文化(おはしとかマナーとかお祭りとか…)の由来とか語源とかを学んだ授業が印象深い。世界中のお祭りと日本のそれを比較してみるのもおもしろかった。実際に今回は夏休みに“日本文化のルーツを探る”ということで、色々な日本の代表文化の由来といわれている諸説について調べてみたが、とてもおもしろかった。日本の特異な文化の由来はどれも興味深いと思う。外国との関係も浮かび上がってくるのだから驚きだった。学習を通して日本の古代史や言語学を研究している人に興味がわいた。日本語自体の由来というのもまだ明らかになっていないようですし、研究のしがいもありそうだ。」とある。生徒の事後感想からは、日本文化を多文化の中の一つとしてとらえてみる事ができたことがわかる。

日本文化グループの夏休みのレポートでは「なぜ日本のアニメは海外で人気なのか?」、「座り方」、「日本文化のルーツをさぐる」、「カーゴ・カルト」、「和菓子から日本のところを感じる」、「行く言葉と来る言葉」のテーマが、クラスごとの代表発表のテーマとして選ばれた。授業で扱った内容を、各自の視点で深めたり発展させたりすることができたレポートが多かった。

②成果と課題

生徒の自由記述から、「日本に住んでいると、どれだけこの文化が世界標準からみて(良い意味で)おかしいのかということに気付いていないが、こういう学習を通して、また留学生なども交えて学習することで、それを再確認することができたと思う。世界に日本文化を解説することがどれ程大変か、逆に日本人が世界の文化を受け入れることの困難さを改めて考えさせられた。」とあるように、日頃は意識しないでいる日本の言葉や文化が留学生には驚きであったり、受け入れがたいものであったりすることに授業を通して気づくことができ、日本文化について再認識するきっかけを持つことができたとともに、日本人が世界の文化を受け入れることの困難さを改めて考えさせることができたことが成果である。

これらの授業実践をふまえて、今後どのようなコミュニケーションが生活の中で必要になるのかについては、取上げる授業実践テーマの他グループとの関連性を工夫していきたい。

2) 言語文化グループ(鈴木克彦)

①授業内容例

「外国学習を科学する」というタイトルのもと、白井恭弘(2008)「外国語学習の科学」【岩波新書】

を読み、外国語を身につけるということはどういうことかを科学的・実証的なアプローチを行った論文を読むこと通して考えさせた。2～3名のグループで事前に各章ごとにまとめて、教室でレポート発表を行い、その内容をもとに活発なディスカッションを行った。ディスカッションは発表グループが考えたフォーカスポイントをもとに行われた。授業の終わりに「なるほど日記」に学んだことや感想を書き、各自がふり返った。夏休みの課題では言語学習や異文化理解を含む内容について文献研究やフィールドワークを行い、9月に発表会を行った。

②成果と課題

語学学習のメタ認知的知識を形成することを目的とし、英語教授・学習理論をディスカッションし、それぞれが考えた高校の授業のあり方または学習方法まで議論できた。生徒の感想では「自分も英語を学習する際参考にしたいことが多くあった」「インプット、アウトプットのバランスを考えて、英語以外の外国語を学んでみたい」「授業の最後にプリントを提出するので、自分の考えをまとめやすかった」「グループでの発表は新鮮だった」「他の人の意見を聞くので、別の見方ができるようになった」「発表後グループに分かれて討論するので、自分のはっきりしない考えが他の人の意見をきくことでスッキリした」などを得た。語学学習のメタ認知形成は達成できた生徒もあった。多くの生徒は語学学習を見直すことはできたようだが、異文化理解の視点でやや不足するものがあつた。次は文化の差に着眼点を置いた、身近な学校教育を題材にして、世界に目をむけさせるようにし、今回と同様の手法でアプローチする予定である。

3) 韓国文化グループ (岡村)

①授業内容例

○韓国の言語・表現1 (4月30日実施)

ハングルが発音器官の部位を表す子音字と母音字の組み合わせによって発音ができるという規則を理解させ、反切表の見方を説明した。その後、プサンで撮影したハングル文字看板のスライドを見せてクイズ形式で読ませた。また、欧米からの外来語については、日本語の読みとほぼ似ている点に気づかせながら授業を進めた。さらに、ハングルで表記された日本地図の地名から、「東京」を『トキョ』、「京都」を『キョト』を読ませて、韓国語では、長音の発音習慣が少ないことにも触れた。

次に韓国語の中で「山」を『サン』、「計算」を『ケサン』、「新聞」を『シンム』等の漢字語を発音させて、日本語と発音が似たものが少なくないこと

を実感させ、韓国語に対する親近感を持たせた。

○日韓の生活文化の比較1 (5月28日実施)

日韓の生活文化の違いを実感させるため、韓国での留学経験のある大学院生の島崎さんと韓国からの留学生の金ミンジさんを招き、それぞれの留学体験について話してもらった。

島崎さんは、留学中の経験で、友達同士であれば、手をつないだり、肩を組んで歩いたりすることは当たり前で、恋人同士であれば、ペアルックも珍しくないこと。些細なことであっても、昼夜問わず携帯電話で連絡をとりあつたりすること。また、韓国人の友人と旅行に行き同宿した際、同じ部屋で同じ布団を二人で分け合つて使つた経験を例にあげて、韓国人は、日本人と比較して身体接触の頻度が高く、人間関係が濃密で情が深いことを理解させた。

金ミンジさんは、日本に来て驚いたこととして、信号をきちんと守る歩行者。時間通り正確に運行する交通機関。アルバイトとして働いた店では、すべてマニュアル通りに仕事をこなしている点をあげ、日本人は韓国人と比較すると決まりをしっかりと遵守し、やや堅苦しく窮屈な印象を持ったことを話した。また、食堂で一人で食事をする日本人の姿は寂しくないのかと違和感を持ったことや、実際に異国で生活すると、似ているようで、随分戸惑うことがあり、慣れるまで、少し時間がかかるという経験を話した。

○日韓の宗教文化の比較1 (7月9日実施)

儒教の創始者孔子と言行録「論語」をまとめた弟子について、生徒の国語や世界史で習った知識を思いかべさせて儒教の概要として歴史や儒教文化圏について整理させた。次に論語の教えが日本の生活習慣の中いかに浸透しているか、儒教の浸透度チェックを行った。さらに、論語の代表的な教え「孝」・「忠」・「礼」・「仁」を論語の解釈と照らし合わせながら、それぞれの教えについての理解を深めさせた。最後に日韓の儒教比較を行い、会社・世間を優先する「忠」を重んじる日本人と家族・身内を優先する「孝」を重んじる韓国人との文化摩擦の例を考えさせた。

②成果と課題

韓国グループでは、言語と生活と宗教という3つの切り口から、異文化との共生に必要な感性と寛容な精神を養い、異文化間に起きる諸問題に柔軟に対応する能力を育成することをねらいに授業内容を考えた。

言語では、ハンゲルの読みの学習を通して、ローマ字読みのように子音字と母音字の組み合わせで読

めること、韓国語の読みが日本語と類似した点が多くあることに気づかせ、親近感を持たせることができた。また、韓国語の発音の特徴である長音を使う習慣が少ないことを理解させることができた。しかし、日本人が苦手な音節の最後の子音（終声）の発音や激音・濃音の使い分けの理解に関しては、より多くの説明時間を要するため、発音習慣の違いを深めるには至らなかった。発音習慣の違いによる誤解を生まないように、お互いの言語の発音の得手・不得手をしっかりと認め合い、発音の特徴を寛容に受け入れる気持ちを育てていく必要があると思われる。

生活文化の比較としては、日韓双方の二人の留学経験者の話から、韓国人は日本人と比較して、人との情に厚く、仲が良いことの証として、遠慮をしないことがあり、親しき仲にも礼儀ありと友人に対して控えめになりがちな日本人との違いを知らせることができた。また、臨機応変に物事をこなすおおらかな韓国人と決まり事を忠実に遵守する日本人の違

いに気づかせた。日韓二国間を比較した点は、比較対象が限定しやすく、コミュニケーション学の導入部としては適切であったと思われるが、さらにイスラム・欧米・ラテン文化圏との比較を通してより視野の広がりを持たせた方が、グローバル化の進む日本の現況に即した実践的・応用的なものになりうると考えられる。

儒教について、その概要を押さえ、儒教のどのような教えがそれぞれの国で重視されてきたかの違いを比較させることによって、実生活の中に表れる生活習慣や価値観の違いを明らかにしていくことができた。同じ儒教文化圏であっても、その教えの中で何を優先させるかで、誤解の原因となることを理解させることができた。しかし、現代の日本文化を形成している儒教以外の自然崇拜・仏教・道教・神道・キリスト教・武士道等の宗教や思想の影響についても、短時間で生徒に誤解なく教えていく必要がある。日本文化についての理解を深める授業をさらに設定するの必要を感じた。

3. 授業内容

「地球市民学」(前期) 多文化コミュニケーション学

回	月 日	日本文化グループ	韓国文化グループ	言語コミュニケーショングループ
1	4月16日(金) 事前アンケート・ 全体説明・希望調査	オリエンテーション グループの説明5分	オリエンテーション グループの説明5分	オリエンテーション グループの説明5分
2	4月23日(金)	特別授業1 多文化コミュニケーション合同ワークショップ(3グループ合同) * 多文化社会をサバイバルする!(野田先生) コミュニケーション合同ワークショップ 言語・非言語によるコミュニケーションを経験する 体験的異文化教室		
3	4月30日(金)	日本のところを探る1 (桜)	韓国の言語・表現1 ハンゲルを読もう	言語科学1 入門 母語と外国語
4	5月7日(金)	日本のところを探る2 (ことば)	韓国の言語・表現2 ハンゲルを書こう	言語科学2 子どもと言葉の習得
5	5月21日(金)	特別授業2 多文化コミュニケーション合同ワークショップ(3グループ合同) 留学生との合同交流会・発表会or討論(野田先生)		
6	5月28日(金)	日本のところを探る3 (ことわざ)	韓国の生活文化1 留学生から学ぶ	言語科学3 言語ゲーム
7	6月4日(金)	特別授業3 「文化とコミュニケーション」(高井先生)(3グループ合同)		
8	6月11日(金)	日本のところを探る4 (表現)	韓国の生活文化2 日・韓の生活の違い	言語科学4 外国語とコミュニケーション
9	6月28日(金)	特別授業4 世界の宗教文化入門:多文化コミュニケーションと宗教(野田先生) (3グループ合同)		
10	7月2日(金)	日本のところを探る5 (宗教文化)	韓国の生活文化3 食文化の違い	言語科学5 外国語学習のメカニズム
11	7月9日(金)	日本のところを探る6 (年中行事)	韓国の宗教文化 日韓儒教比較	言語科学6 外国語を身につける
12	7月16日(金)	まとめ+夏休み探究課題の 説明	まとめ+夏休み探究課題の 説明	まとめ+夏休み探究課題の 説明

13	9月3日(金)	夏休み探究課題「受け入れる溶け込む」の発表	夏休み探究課題「受け入れる溶け込む」の発表	夏休み探究課題「受け入れる溶け込む」の発表
14	9月10日(金)	発信型コミュニケーション合同学習の準備	発信型コミュニケーション合同学習の準備	発信型コミュニケーション合同学習の準備
15	9月24日(金) 3グループ合同	発信型コミュニケーション合同学習(留学生とともに) 「価値観の異なる人々とのコミュニケーション力を磨く」(留学生・高井先生)		
16	10月1日(金)	振り返りと総括・事後アンケート		

4. アンケート結果

(1)成果

「多文化コミュニケーションに関する事前と事後調査」のアンケート(5件法)結果を比較すると、各項目が増加していることがわかる。特に(1)-5「世界の多様な文化を持つ人々とコミュニケーションすることができる」の変化が0.3と変化が大きい。(両側検定: $t(113) = 2.77$, $p < .01$)

一方、(1)-4「世界の多様な文化を受け入れることができる。」については、変化が0.07で変化が小さい。留学生との交流でその困難さを実感しているからだ。

1) アンケート結果 I

	(1)-1	(1)-2	(1)-3	(1)-4	(1)-5
事前	3.64	2.67	4.41	3.67	3.03
事後	3.84	2.90	4.53	3.74	3.33

(1)-5のT検定のためのデータ

	プレテスト	ポストテスト
平均値	3.04	3.31
標準偏差	.88	.92

2) アンケート結果 II

「多文化コミュニケーション学に関するアンケート調査」(事後)結果で、平均が4以上の項目は、(1)-2「学校外の先生の授業では経験的、専門的な知識が得られると思う。」(1)-4「多文化コミュニケーション学」で扱ったような“答のにくい問題”について学習することは大切である。(1)-9「多文化コミュニケーション学」の授業を通して、自分の教養を深く広くすることができると思う。」の3つである。「多文化コミ学」の目標が生徒に理解されていることがわかる。一方、平均が2~3未満のものは、(2)-6「多文化コミュニケーション学」は週1時間では時間が足りないで時間数を増やして欲しいと思う。」(2)-5「多文化コミュニケーション学」で学習することにより、他教科の学習時間が減って、他教科の学力が低下したと思う。」(2)-7「多文化コミュニケーション学」を週1時間学ぶより他教科の学習がしたいと思

う。」の3つである。「多文化コミ学」の授業内容の意味が生徒によく理解されていることがわかる。

(1)-1	3.93
(1)-2	4.37
(1)-3	3.86
(1)-4	4.35
(1)-5	3.91
(1)-6	3.80
(1)-7	3.81
(1)-8	3.89
(1)-9	4.10
(1)-10	3.31
(1)-11	3.47
(1)-12	3.69
(1)-13	3.56
(1)-14	3.53
(1)-15	3.18
(2)-1	3.78
(2)-2	3.66
(2)-3	3.74
(2)-4	3.06
(2)-5	2.32
(2)-6	2.20
(2)-7	2.44
(2)-8	3.03
(2)-9	3.31
(2)-10	3.62

5. 成果と課題

(1)「多文化コミュニケーション学」のカリキュラム開発について

高校2年生の前期における授業実践をもとにした「多文化コミュニケーション学」のカリキュラム開発については、各授業と講義(参照 授業計画)を教材集にまとめている。

特徴

- ・少人数教育13~14名
- ・三人の教員配置 教科融合
- ・外部講師(大学教員)による講義

- ・留学生の参加
- ・協同学習
- ・生徒の授業への参加度大きい
- ・生徒の満足度高い
- ・既存教科との棲み分け

上記は、教科内での実践だけでは、進度などの制約が大きく、自由な実践がしにくいことと、学際的な分野が多く含まれていて、教科をつなぐ意味合いがあることからの特徴である。

さて、当初の「多文化コミュニケーション学」のカリキュラム開発における目的を現在は達成していることをふまえて、今後の課題は次の三点である。

- ①授業担当(教科)者の拡大→授業実践をふまえた「新教材集」の作成と検討→「新多文化コミュニケーション学」カリキュラム作成へ
- ②高1と高2の授業実施時期を入れ替える→高校1年生前期を「多文化コミュニケーション学」にする。
- ③各担当者の教育実践を土台にした「新教材集」の開発

また、卒業3年後の時点で、卒業生への追跡調査・意識調査(大学で「多文化コミュニケーション学」の授業が役にたったか)が必要となる。

(2)「SLPⅡが目標とする力」との関連について

最後に行った3グループ合同の「研究発表会」の内容が今年度は充実していた。またテーマの選択とわかりやすい発表についても工夫があった。特に、高井先生からは「どの発表も昨年よりレベルが高い。テーマを文化やコミュニケーションと関連づけて調べ発表していることがすばらしい」と賞賛のコメントをいただいた。

SLPⅡの目標とする力は、i「科学への興味・関心」ii「科学的探究心」iii「人間・(自然)・社会に関する科学的理解力」iv「論理的・多元的・批判的思考力と表現力」v「課題設定・課題解決力」の5つである。事後アンケートの生徒感想には、「夏休みの課題発表で、一つの一貫したテーマをもとに、3つの異なるグループが興味のあることを調べていて、発表を聞くことで、ものごとを様々な角度で見ることができました。」とある

半期の「多文化コミュニケーション学」の授業を通して、一人一人の生徒が留学生や学外講師の先生よりの講義等で、i「多文化(科学)への興味・関心」を持ち、v「課題を設定する力」とii「科学的探究心」で、夏休みのレポートに取組み、iv「論理的・多元的・批判的に思考する力と表現する力」で3グループ合同の「研究発表会」に参加し、ともに学び合うこと

で iii「人間・(自然)・社会に関する科学的に理解する力」を修得できたことがわかる。

今後の課題は、それらを踏まえて後期の地球市民学(平和と共生の科学)で具体的に何ができるかについて話し合いをつみ重ねることで問題意識を発展させ、v「課題解決力」として修得させていくことである。

(文責：齊藤真子)